

主 題：自由と向き合う5

聖書箇所：ローマ人への手紙 7章6節

今朝はローマ人への手紙7：6をご一緒に学んでまいりましょう。

パウロは私たちに、かつての私たちはこのような者であると三つのことを教えて来ました。かつて私たちは罪の奴隷であり、律法に逆らい、そして、神のさばきを受けるにふさわしい者でした。しかし、今の私は新しく生まれ変わったとパウロは言いました。私は主にあって自由とされた、私は自分を捕えていた律法に対して死んだ者であり、この束縛から解放されて自由になった。また二つ目に、私は主と結ばれた、私は主と一つにされたということを教えました。三つ目に、主のために実を結ぶ者へと変えられた、主のために実を結ぶ者、つまり、私たちはこの世にあってこの主のすばらしさを世の人々に明らかにして行くのです。私たちはそのために救われたのです。この主のすばらしさ、救いのすばらしいメッセージを伝えるために私は救われ、神のために実を結ぶ者となったと教えました。どのようにしてこのすばらしい証をこの世に為して行くのでしょうか？私たちが見て来たのは、この世にあって新しい歩みを継続することでした。主に喜ばれる歩みを為して行くことによって、私たちはその喜びを与えてくださっている神を、感謝を与えてくださっている神のすばらしさを世に証して行くのです。

同時に、私たちは日々の生活において主に似た者に変えられて行くその過程をもってこの主のすばらしさを証して行きます。信仰者の皆さん、私たちは感謝なことに主によって日々変えられて行きます。コロサイ3：10で「**新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。**」とパウロが言ったように、私たちはそのようなにして日々造り主の形に似た者へと変えられて行くのです。そのようなみわざを主が為してくださっているのです。なぜでしょう？私たちが神のために実を結んで行くためです。この世にあってキリストのすばらしさを証し続けて行くためにです。そのように主は私たちのうちに働きを為し続けておられるのです。

☆しかし、今は、 — 救いをいただいた後の私

4. 主に心から仕える者 6節

新しい実、救われた私たちが変えられて行くこと、そこには一つの大きな特徴があります。そのことをこの6節でパウロは私たちに教えてくれますが、それは「主に従う」という特徴です。6節に「**しかし、今は、私たちは自分を捕えていた律法に対して死んだので、それから解放され、その結果、古い文字にはよらず、新しい御霊によって仕えているのです。**」とあります。「仕える」、神に仕える、神に従い続けて行くこと、それがこの新しい実を結ぶ人、救われた人の特徴なのです。ですから、四つ目は「主に心から仕える者」にされたとパウロは言います。言い方を変えるなら、私は主の奴隷となったということです。彼は私たちにそのことをもうすでに教え続けています。今見た6節の最初のところには「**今は、私たちは自分を捕えていた律法に対して死んだので、それから解放され**」、つまり、救いのことを話すのです。その後の接続詞を見てください。「**その結果**」とあります。救われた結果、これまでとは違う生き方が始まったと言うのです。

神学者であるジョン・マレーは、この「結果」という接続詞に関してこのようなコメントをつけています。「このことばが教えていることは、我々が縛られていたものに対して死んだ結果、我々は霊、聖霊に従う新しい生き方をしようになっているということだ。」と。今話したように、パウロがここで言いたかったことは、救われた人々には確実に変化が生じるということです。これは別に新しいことではありません。このことをパウロは繰り返し私たちに教えています。私たちはことばによって「私は救われた」と言っている人々ではありません。救われた人々はその生き方が明らかにするのです。なぜなら、その人の生き方が変わるからです。神が変えるからです。どのような生き方へと変えられたのでしょうか？先ほども話したように、私たちは主の奴隷、神の奴隷へと変えられたということです。

6：16では「従順の奴隷」とパウロは言いました。18節では「義の奴隷」、19節にも「義の奴隷」と記しています。6：22には「神の奴隷」とあり、パウロは繰り返して「奴隷とされた」ということを教えています。そして、ここでも彼は私たちに、実は救われた私たちは主の奴隷とされたということです。7：6に戻って、最後の「**仕えている**」という動詞を見てください。何となく仕えたい時に仕え、仕えたくない時には仕えないとそのような考えを持つ方がいるかもしれません。でもこの「仕える」ということばは「奴隷である」ということです。「隷属している」という意味です。「奴隷として仕えて行く、服従する」という意味です。新約聖書に25回出て来ます。ですから、生まれ変わった私たち、救われた私たちは、今度は主の奴隷として生きる、そのような者へと変えられた、これが信仰者なのです。

ジョン・マッカーサー先生はこの「奴隷」に関して「これは最も低いみじめな奴隷である。主人の所有物であって、合法的に賃金を払うことなしに労働を課すことができる奴隷」と言っておられます。給料を全く払わない、それが合法的に認められるような存在だと言うのです。言い方を変えるなら、この奴隷は身分も権利も全くない人のことです。あなたはそのような者になったと言うのです。前回も触れましたが、マタイの福音書6：24の中でイエスが「**だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。…**」と言われました。これを直訳すれば、「**だれもふたりの主人に奴隷として仕えることはできません**」と言っているのです。私たちはどちらにしる奴隷なのです。

神の奴隷となったということは、それまでは神の奴隷ではなかったということです。すでに学んだように、私たちは罪の、サタンの奴隷でした。ある人たちは神の奴隷と聞くと「そんな堅苦しい自由のない選択は嫌だ」と思うかもしれません。でも、かつて私たちがサタンの奴隷として、罪の奴隷として生きていた時、その主人であるサタンが私たちに約束したことは彼の運命と同じように私たちひとり一人が永遠の地獄に行くことです。祝福も永遠のいのちも救いも約束できません。サタンがそれらをもっていないからです。悲しいことに、私たちはその主人に一生懸命、忠実に従い続けていたのです。しかし、私たちはそこから救われ、新しく生まれ変わったのです。自由とされ、サタンの奴隷がまことの神の奴隷へと生まれ変わったのです。パウロはそのことをこの6節で教えるのですが、パウロはここでも「かつての自分」と「今の自分」を対比しています。「**古い文字にはよらず、新しい御霊によって仕えている**」と、今までの自分と今の自分を比較することによって、パウロは大切なメッセージを私たちに教えようとしています。特にこれは、最初から見えて来ているように、7：1にある通り「律法を重んじていた人々」に対してパウロはこのように言うのです。私たちは「**古い文字**」によって奴隷として仕えて来たが、今私たちは「**新しい御霊によって**」奴隷として仕える者へと生まれ変わったと。

☆二つの生き方

1. かつての私たち：古い文字によって仕える人とは？

かつての私たち、「古い文字によって仕える奴隷」とはどういう人なのでしょう？この「**古い文字**」とは「**律法**」のことです。そして、この律法を学び、重んじてきた者たちは、パウロのことばを借りるなら「古い文字によって仕えてきた者たち」だと言います。6節の最初に「自分を捕えていた律法」とあります。かつての私たちは「**律法の奴隷**」として歩んで来たのです。すなわち、パウロがここで言いたいことは、文字で示された律法の要求に、一生懸命努力をしてそれを守り行なおうと努めて来たということです。特に、ユダヤ人たちはそうでした。律法を一生懸命徹底的に守り行なおうとして来たのです。なぜ、彼らはそのようにしたのでしょうか？そのような行ないによって神に受け入れられる者となると信じていたからです。そのために彼らは必死になってその命令を守り行なおうとして来たのです。しかし、悲しいことに、そこには救いはありません。かえってそこには「**さばき**」があるのです。ですから、パウロは6：21で「**その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。**」と言いました。ローマ3：20では「**なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。**」と教えています。

ですから、どんなに一生懸命心を入れ替えて、この神の掟に従順に従って行こう、徹底的にこの教えに従うことによって神のご厚意をいただこうと思っても、悲しいことに、私たちはそれを守れないというのです。なぜなら、私たちの努力は不完全だからです。神の律法に完全に従って行くことなど私たちにはできません。ということは、どんなに私たちが頑張っても、神のご厚意を得るような完全な行ないを為すことはできないのです。私たちにはできないから、神の助けが必要だったのです。神のあわれみのみわざが必要だったのです。神が私たちのように、どうすることもできない者をあわれんでくださるなければ、私たちは一番ふさわしい永遠の滅びへと向かっていたのです。

パウロは、今私たちが見ていることをⅡコリント3：6でこのように言っています。「**神は私たちに、新しい契約に仕える者となる資格をくださいました。文字に仕える者ではなく、御霊に仕える者です。文字は殺し、御霊は生かすからです。**」。今ちょうど私たちが学んでいるのと同じことをパウロはここでも教えているのです。今見て来たように、律法に対してはそれを聞いた者たちに責任と結果が伴うのです。律法のメッセージを聞けば、そのメッセージに対して責任が生じるのです。神がこうしなさいと言われたなら、それを守るかどうかという責任が生じるのです。そして、守れば神の祝福があるけれど、それを守らなければ神のさばきがあるのです。ですから、守れないから「**文字は殺す**」と言います。そこには「**死**」があるからです。文字それ自体が悪いのではないのです。そこには条件、結果が伴うのです。それを守らなければ必ずそこにはふさわしい報いが来るからです。

あのマルティン・ルターは、4～5世紀にかけて活躍した教父であり神学者であったアウグスティヌスのことばを引用しています。「**きちんと正しく生きるべきであるという戒め（律法）を、我々が受け取**

るべきだという教えは、いのちを与える霊がないなら、殺す文字である」と。つまり、もし神にこれを守り行ないなさいと言われたなら、私たちはみな失格者になる、なぜなら、私たちは残念ながら、神の言われたことを守ることができないからです。唯一の希望は、神の助けによって私たちがこの救いに、ご厚意にあずかるということだけです。どのような善人でも神の要求しておられる聖く正しい人になることは絶対に不可能だから、神の助けが要るのです。アウグスティヌスやルターが信じていたように、いのちを与える聖霊なる神の助けがなければ、このすばらしい神の律法は私たちの神への不従順を暴露するだけでなく、有罪判決のための決定的な証拠となるのです。私たちが神の前に立つ時に、このみことばが私たちを責めます。なぜなら、神は「あなたはそのように生きなかった」と言われるからです。だから、神の前でさばかれる時に、罪人は何一つとして神に弁解できないのです。あなたが律法を守らなかった、逆らったからです。ですから、「**文字は殺す**」というのです。文字自体はすばらしいものです。そこには神のみこころが示されています。でも、人々は誤解したのです。律法を守ることに汲々としたのです。私たちは神のあわれみを求めるべきです。神の基準から外れている私たちには助けが必要です。どうぞ、私をあわれんで救いを与えてくださいと、神の前に救いを求めるのです。ところが人々は、「守れる」、「できます」と言ったのです。そして、彼らはその支配の下に自らを置いて、悲しいことに、いつの間にか自分たちは守れていると信じ込むようになって行くのです。

Ⅱコリント3：6にあったように「**文字は殺し、御霊は生かす**」と、パウロはここでも主イエスだけが信じるすべてのものに聖霊の働きを用いて救いのみわざを為されるということを教えました。主だけが私たちを罪から救い出して、神の奴隷として生まれ変わらせることができる唯一のお方なのです。この方の恵みによって私たちは救われるのです。もうすでに、私たちが6：23で見たように、永遠のいのちは神の下さる賜物なのです。また、よく皆さんご存じのように、エペソ2：8-9で「**あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。：9 行ないによるものではありません。だれも誇ることのないためです。**」と教えています。だれも自分の努力によって救いを得ることはできません。神の一方的な恵みによって、救いを信じるひとり一人がいただいたと教えるのです。信仰者の皆さん、私たちは、私がこのようなことをしたから神は私をあわれんで救ってくださったとはだれ一人言えないのです。みな神の恵みによってこの救いへと招かれました。救いは恵みです。救いは神の一方的な恵みのゆえに信じるひとり一人に与えられるものです。

そのように考えると、宗教に救いがないということは真実です。なぜなら、宗教は私たちにさまざまな行ないを強要します。もちろん、そこにはある種の慰めがあるかもしれませんが。ある種の心の支えになるかもしれない、拠りどころとなるかもしれませんが。しかし、いかなる宗教も罪人をその罪から救い出すことはできません。人のつくり出した宗教が私たちに要求することは、形は違ってもみな同じです。行ないなのです。例えば、先祖供養をすれば、先祖を敬い続ければと様々な良い行ないを強要します。そして、多くの人々はそのようなことをしているがゆえに、自分は救われて天国に行けると思っていて、そのことを少しも疑っていません。では「なぜ、あなたはそのように確信が持てるのですか？あなたが天国に行けるといふその根拠は何ですか？」と質問すると、彼らが答えることは「これこれの教えを守っているから」、「この教えを真剣に私は守っているから」、「私は悪いことはしていないから、私は良い人間だから」と、すべてその救いの根拠は「行ない」です。律法を重んじた人々とよく似ています。彼らも「私はこれだけ神の教えを守り続けて来たから大丈夫だ」と言っているからです。神のおことばが私たちに教えてくれることは、いかなる行ないによっても私たちは絶対に救いに至ることはない、行ないによるのではないということです。

2. 今の私たち：新しい御霊によって仕える人とは？

さて、この7：6の終わりには「**新しい御霊によって仕えているのです。**」とあります。「今」について話しています。かつての私は古い文字に仕えていたが、今の私は新しい御霊に仕える、新しい御霊の奴隷として仕えて行く人生が始まったと言います。「**古い文字**」は律法のことでした。「**新しい御霊**」とは聖霊のことです。つまり、パウロはここで、今の私はこの聖霊の奴隷、主なる神の奴隷として生きる、その方に仕えると言うのです。この訳を見て「**新しい御霊によって**」と言われると、御霊が新しくなったのかと思ってしまうのですが、ここでパウロが言わんとしたことはそういうことではないのです。聖霊なる神が新しくなったということではなくて、この「新しい」というのは「御霊に属する、御霊がもっている新しさ」のことです。つまり「聖霊によってもたらされる新しい人生」です。聖霊だけが新しい生き方をもたらすのです。新しい生き方をしようとするなら、聖霊なる神の働きが必要です。そのことをパウロはここで言うのです。新しい生き方が始まった、新しい人生が始まったと。その新しい人生や生き方をもたらすのは聖霊なる神です。これまでこの神の律法に自らの努力で従おうとして来た者が、主の助けをいただいて生きる人生へと生まれ変わったのです。

1) 主の奴隷として主に仕えて行く人生

・従順に仕える人

ですから、新しくされた一人ひとり、クリスチャンである皆さんは、このことを考えなければいけないのです。私は奴隷として主に従う者として生まれ変わった、では、私は主の奴隷として神に喜ばれる生き方をしているかどうかです。主に従順に従い続けているかどうかです。私たちの身分ははっきりしました。神の奴隷なのです。私たちには身分も権威も何もないのです。私たちは何かの働きをしたからご褒美をいただける、ではないのです。私たちはもうこの主人にただ従い続けて行く奴隷にすぎないのです。かつての主人とは違うのです。この主人は私たちには素晴らしい約束をくれました。罪の赦しをくださった、永遠のいのちを約束してくださったのです。そして、私の責任はこの主人の前に正しく歩み続けて行くことです。この方のみこころに従い続けて行くことです。

だから、私たちが考えなければいけないことは、毎日の生活を通して私は神のおことばに従い続けているかどうかです。この主人の命令に従い続けているかどうかです。なぜなら、それこそが忠実な良いしもべだからです。皆さんはあなたがた一人ひとりの主人である神を喜ばせておられますか？あなたの主人はあなたを見て喜んでいますか？そのことを私たちは考えなければいけないのですが、同時に、私たちには神の戒めが与えられています。私たちは神の律法が素晴らしいものだとは何度もここで学んで来ました。私たちイエス・キリストを信じた者には律法が全く無くなって、何をしても構わない者になったのでしょうか？決してそうではありません。

2) 主の命令に従い続ける

・新しい戒めを守る人

ヨハネの福音書13：34でイエスが「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」と言われました。これが「新しい戒め」だと言います。ローマ13章でパウロはこのイエスの教えに関して、このように語っています。8節「だれに対しても、何の借りもあってはいけません。ただし、互いに愛し合うことについては別です。他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです。」、もし、あなたが兄弟姉妹を心から愛しているならあなたは律法を守っていることになると言うのです。10節「愛は隣人に対して害を与えません。それゆえ、愛は律法を全うします。」とあります。私たち、新しく生まれ変わった者たちは、このような戒めを神からいただいたのです。何のルールもない、自分の好きに生きていいという、そのような人生を主は私たちクリスチャンに与えたものではありません。このように生きなさいという戒めを主は私たちに与えてくれているのです。つまり、聖書の教えは私たちは律法とは無関係であり、全く無視して生きていいというわけではありません。私たちは神の教えに従って歩んで行くことが必要なのです。

かつては律法を一生懸命守ることによって、救いを得るようにと人々は信じて生きていました。律法は救いをもたらしませんでした。神の恵みによって私たちは救いを得たのです。救いを得た私たちは神の教えに対して従って行こうとするのです。救いを得るためではないのです。それが神を喜ばせる歩みだからです。主イエス・キリストはクリスチャンが互いに愛し合うことは大切なことだと言われました。それがわたしの教え、わたしの戒めであると。覚えておられますか？「大切な戒めは何か」という質問に対して主イエスは「神を愛することであり、隣人を愛することだ」とお答えになりました。私たちは完全に律法を無視するものではありません。私たちは神の教えに従う者たちです。そして、神の教えに従って行こうとする生き方は、あなたが神を愛していることの証なのです。どんなに神を愛すると言っても、神のおことばをないがしろにしているのであれば、神はあなたのことばを信用しません。神を愛する人々は神のおことばに従い続けて行こうとする人々です。

・神への愛をもって仕える人

神の関心はその命令に従順であるかというそのことであり、また、もう一歩進めば、どのような思いをもって従っているのかということです。神の命令に対してあなたが従おうとしているかどうかであり、そして従っているなら、あなたがどのような思いをもって従っているのかです。行為だけではなくあなたの心にも神の関心があるのです。先ほど話したルターが引用したアウグスティヌスのことばには考えさせられます。4～5世紀にいた彼の信仰は驚くべきものです。「我々が何かをすべきとかすべきでない」と教えられる時、つまり、彼は律法のことを言うのですが、「奴隷のように罰を恐れたり、子どものように報いを欲してではなく、自由に神への愛をもって行なわなければならない。」、その通りです。命じられたことに対して自分の自由を働かせて、神を愛するから喜んでしましようと、そのような心の態度をもって主に従い続けて行くのです。そして、彼はこのように続けます。「しかし、これは聖霊によって愛が注がれているのでなければ不可能である」と。その通りだと思いませんか？神のみことばを見て「しかたがない、これをしなければ罰を受けるから…」と。家庭でも、例えば「これをしなさい」と子どもに言った時に「うるさいなあ、でも、しなければ怒られるからしよう」と、命じられたことに従っているかもしれませんが、行為は確かにあっても心が正しくありません。神が言われることに対し

ても「いやだけれど、しなければいけないから…」というような思いで私たちがするなら、神はお喜びにならないことは明らかです。「これをするなら神が豊かな報いをくれるから頑張ってしまうよ」でもありません。

私たち信仰者の主に従順に従って行くという行為の動機は、神に対する愛です。神を愛するがゆえに神のために生きようとするのです。神を愛するがゆえに神に従おうとするのです。なぜ奉仕をしますか？「人から何か言われるから」ではなくて、神を愛するからです。なぜ、ひとり一人に与えられている社会におけるさまざまな責任、家庭における責任をして果して行こうとするのでしょうか？それは神を愛するからです。神がそのような務めをくださったからです。

・聖霊なる神に頼って仕える人

でも、アウグスティヌスが言ったように、このような働きを私たちが為して行くためには「聖霊によって愛が注がれていなければならない」のです。つまり、神の助けが要するというのです。私たちのうちには神に対する愛はないと言います。しかし、神が働いてくださって、私たちの心を溶かし続けてくださって、私たちはこの神に対して「ありがたいな、本当にすばらしい神だ、もっとこの神に従って行きたいし、この神を喜ばせて行きたい」と、そのように神が私たちのうちに働く時に、私たちは正しい動機をもって働きを為して行くのです。それが私たちには可能なのです。もう一度7：6を見てください。今話して来たことがなぜ可能なのかというと「新しい御霊によって仕えている」からとパウロは言います。聖霊なる神によって私たちに新しい生き方がもたらされたのです。聖霊なる神が私たちを生まれ変わらせただけでなく、主が喜んでくださる生き方を私たちが実践できるように神が私たちを助け続けてくれるのです。あなたを助けてくれるのです。ですから、聖霊なる神に頼って信頼を置いて生きる新しい生き方が始まったのです。神の奴隷とはそういうことです。私を救ってください、私を変え続けてくださっている神に依存しながら、助けを求めながら、主のみことばに従って行こうとするのです。

・救われた者に与えられた新しい責任

この6章から、私たちはパウロのメッセージに対する様々な反論をパウロ自身が想定して、そして、そのパウロの教えに反する人々に反論をして来ました。「赦されたのだから、何をしても構わない」、また「罪を犯しても赦されるのだから好きに生きてもいい」、「パウロの教えを聞いていたらそのようになりますよ」と言う人々に対して、とんでもない、救われたということはこれまでと同じ生き方ができない、生まれ変わったのだということをパウロは私たちに繰り返し教えて来ました。私たちは罪から解放されて自由を得ました。私たちは永遠に完全に罪が赦されましたが、だからといって自分の肉の導くままに、罪の中を歩み続けることは間違っています。私たちには新しい責任があるのです。

ジョン・カルヴァンはこのようなことを言っています。「もし我々が律法の隷属から解放された目的が我々を神に仕えさせるためにあるなら、このメッセージから罪を犯す自由を受け取る者らは邪悪である。さらにまた、律法から解放されたなら、食欲の手綱を緩めることになると教える者どもは、よこしまなことを語っているのである。」と。これまで見て来たように、私たちが律法の隷属から解放された目的は神に仕えるためでした。もしそうであるなら、このメッセージから罪を犯す自由を受け取る者たちは邪悪である、そのメッセージを聞いて、罪を自由に犯せばいいと、もしそのように思っているならその人は邪悪だと言います。律法から解放されたと言っているながら、食欲の手綱を緩めること、つまり、どのように生きてもいい、食欲のままに生きてもいいと教えている者どもはよこしまなことを語っている、彼らは間違っていると言います。なぜなら、生まれ変わった者たち、救われた者たちはかつての生き方と違う生き方をするからです。パウロが語ったメッセージ、神の子の福音は生き方を変えるのです。神に対して好き勝手に生きて来た私たちが、今度は神のみことばに従い、そのみこころに従い、神の栄光を現わす者として歩んで行こうとするのです。決して、かつての罪の中を歩み続けてそれで良しとしないのです。そこから救い出され生まれ変わった者だからです。だから、それに反することを教えているとするなら、それは大きな過ちであり大きな不正であるとカルヴァンは言いました。

ジョン・ストットはまたこのようなことを言っています。「律法からの解放は私たちが今は好きなことをしてもよいという自由を手にしたということではありません。それは全くの見当違いです。律法からの解放は、放縦ではなく、他の種類の束縛を導き出すのです。救われた私たちは奴隷なのです。確かに、私たちは律法から自由となりました。しかし、仕えるための自由であって、罪を犯すための自由ではありません。」と。私たちは罪から解放され、新しい者としての生き方が始まったのです。そして、私たちは主に喜ばれる道を選ぼうと選択するのです。なぜなら、私が救われたのはこの主のすばらしさを世に証するためだからです。そのために救われ、そのために生かされているのです。しかも、その歩みを為して行くことができるように、神はあなたに助けをくださいました。新しく生まれ変わった者たちは、新しい御霊によって仕える者たちです。御霊の奴隷として歩み続けて行く者たちです。そのために主が私たちに必要を与え続けてくれるのです。助けをくれるのです。

ですから、信仰者の皆さん、救われた目的をしっかりと覚えて生きることです。私たちは神の奴隷として生まれ変わりました。救われているなら私たちも神の奴隷です。そして、私たちの責任はこの主人を喜ばせ続けるためにだけ生きるのです。この神の栄光を何とか現わしたいという願いをもって生きるのです。罪を犯せば、それを告白して正しく歩んで行くことです。あなたのことばをもって、主のすばらしさを証することです。

・チャレンジ！

皆さん、この1週間、それぞれの所に出て行きます。今私たちが学んで来たことをしっかりと覚えるなら、どうぞ福音を語る機会を神がくださるよう祈り、そして、あなたが本当に救いをいただけてほしいという人々のために、ぜひ失望せずに祈り続けて行くことです。私たちはすぐにその働きを始めることができます。今からその人々のために祈り、その機会を主が与えてくださって、主のすばらしい救い、福音を伝えることができるようにそれを始めて行くことができます。クリスチャンの皆さん、主のすばらしさを証して行くためには、この世に流されてはいけません。例えば、親は子どもたちに対して正しい方向づけをしなければいけません。何のために神は私たちに子どもを託しているのでしょうか？親としての責任は、良い学校に入れることや良いところに就職させることではなく、良い信仰者として子どもたちが主に喜ばれる者として歩んで行けるように、そのことをしっかりと覚えて、そのために祈り、そのことを教え続けて行くことです。世の中は子どもたちを良い学校に入れるために必死です。私たちはもっと大切な目的を得たのです。すばらしい信仰者として歩んで行けるように、彼らを教えて行かなければいけない、彼らを導いて行かなければいけないのです。

私たちが主のすばらしさを証すると言うなら、大人の皆さん、後から続いて来る若い者たちに良い模範を示して行かなければいけません。主を愛するとはどういうことなのかを私たちは後からついて来る者たちに教えなければいけません。主を畏れるとはどのような生き方なのかを教えなければいけません。しっかりと模範を示さなければいけないのです。「私を見ないでください、私は失格者ですから」と、そのような妥協した生き方をしてはいけません。あなたには大きな責任があります。若い者たちに対して、あなたの同僚に対して主を愛する者とはどういう者なのか、どのように生きる者なのか、その模範を示すことです。私たちはこの世にあって、出世のために生きているわけではありません。主の栄光を現わすために生きているのです。ですから、私たちは何をやるにおいても、主のためにベストを尽くすことです。人々の救いのために私たちはそれぞれのところに遣わされていることをしっかりと覚えて生きて行くことです。もちろん、子どもたちに対しても同じです。主の証を為して行くことです。人々に影響を与える者として生きることです。そのためには、主の目を、主の臨在をしっかりと覚えて、そして主のために全力を尽くすことです。主のすばらしさを証する、それが、私たち、救われた者たちに与えられている神からのメッセージ、神の命令です。そのために私たちは生きなければいけないのです。

また同時に、「兄弟姉妹を愛しなさい」と言われました。そこで、このようなことを実践してみてください。今週、兄弟姉妹の励ましになることを何かしてみてください。彼らのために祈ることもできます。彼らのために「はがき」を書くこともできるし、メールを送ることもできます。少なくとも、私たちはこのように言うことができます。「あなたのために祈っています」と。できますでしょうか？そのようにして私たちは自分の愛する兄弟姉妹たちにそれぞれの愛を示すのです。信仰者の皆さん、あなたは主イエスを愛する奴隷ですか？あなたは何よりも主イエス・キリストを愛しておられますか？あなたの返事を聞かなくてもいいのです。それはあなたの生き方が教えてくれます。従順こそがその証明です。イエスはこのようなことを言われました。ヨハネの福音書12：26「わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。…」と。主に仕える者は主に従い続ける者です。主のあわれみによって与えられた自由、自由をいただいた者として主の前に正しく歩み続けて行くことです。それが救われた者に課せられた大きな責任です。そして、救われた者が、救ってくださった神に対する感謝の証です。従順の歩みをもって、あなたの主への愛を証し続けてください。